

# 季節の風景



## やぶ椿 いばき

旧四日市道きゅうよっかいみちが通る尾平地内とおりの一部に、狭い道路に沿つて三百メートルほどとほの間、竹やぶがあり、竹やぶを囲むようにして六十本ばかりのやぶ椿の木が植えられてあります。

椿の木はかなり老木で、幹のあちいうちが白く腐食ぬかしゃくして空洞うつぼとなつてしる木もあります。土地のかなり高齢の方に、やぶ椿がいつ頃植えられたかについてお尋ねしたところ、「さあなあ、私が物心ついた頃には花は咲いとつたに。」という返事が返ってきました。

しかしこのやぶ椿は古木であつても、毎年十一月の下旬になると、濃い緑の葉の間より、かづかないと



赤い花をのぞかせて咲き始めます。木々の葉の散り果てた殺風景な冬景色の中に、点々として咲く赤い花は見る人の心に温かさを感じさせ、道を往く人の足を思わず止めるやせすじはいられないものがあります。

十一月に咲き始めた花は桜が終わる頃まで咲き続けて、結構長い期間に渡つて田を楽しませてくれる花です。

やぶ椿の咲いてじるトを通る時、よく注意して見ると、花の一輪一輪は赤く華やかでありますながら、どこか控えめでいて田舎臭く、なんとなく幼き日の郷愁につながる田舎懐かしい思い出を呼び起します。

とりわけやぶ椿に心ひかれるのは、燃えるような紅色を持ちながりも、「ぱわり」という音とともに散りゆく瞬間のこわきよこ強さに魅せられるのかもしれません。

やぶ椿がもつとも美しく感じられるのが、一月の末から二月にかけての降雪の後です。雪帽子をかぶった枝のわずかな間から、火を灯したような真っ赤な花が、寒さの中でも、そして咲く姿は、表現できないばかりの強さと清々しさが感じられます。

三月に入ると、やぶ椿はじよよ盛りを迎えて、道路脇の椿の木は葉の見えないほどに花を咲かせて紅一色となりまわ。

暖かい春の雨が降り始めると、一夜にして椿の木の下は真っ赤なジユータンを敷きつめたようになります。地に落ちた後も、なおなまめかしいばかりの赤い色を保ち、昨夜の雨に濡れて光っている様は、生あるものへの一抹の哀れさを覚えずにはいられません。  
ふと、頭上に咲く花を見上げますと、雨上がりの椿の花は紅色を一層増しきりきり輝き、美しさの絶頂にあります。



雨にぬれ 紅きわむ やぶ椿 (みちよ)

桜の季節が終わりを告げ、やぶ椿も  
ひとつそりと赤い花の姿を消し、みずみずしい新芽が出番を待つのみとなります。

椿の新芽を眺めながら、今年も大好きなやぶ椿の季節は終わったんだなあと、ゆく春を送る一抹の感傷を覚える中で、この美しい自然を残してくれたふるやとの先人達に、心から感謝の念を抱かずにはいられません。

## 夫婦桜

四季折々に姿を変え、天に向かつて四方に枝を広げる野末の桜（ソメイヨシノ）の大木を、地元ではいつの頃からか誰がいうともなく「夫婦桜」と呼ぶようになりました。花の季節から葉が幹を包んでいる初秋の頃までは、誰の目にも一本の桜としか見えませんが、葉が散り、裸木となつた時、桜は本当の姿を現し、その名の由来を教えてくれます。

これまで一本の桜の木のように見えていたものが、実は二本の太い幹から成り立つており、上部に行ぐにしたがつて、木があ互いに支えあつようにして形よく枝を広げている姿はまるで仲睦まじい夫婦のように見えます。

寒い冬の野中で木枯らしに吹かれながら、自然の厳しさに身を寄せ合つようにして、やがて来る春に向かつてじつと耐えている夫婦桜からは、私たちが口ごもる忘れがちな大切なものを学ばせられる思いがします。



尾平地内 山の神堤末端の桜

## 入梅

梅雨の季節に入る最初の日のことに入梅と呼び、その日から三十日間が梅雨だと言われています。

その昔、気象学がまだ発達していなかつた頃、農作物の出来高をよりよしものにあるために梅雨に入る時期を知つておく必要があり、江戸時代に暦の上で梅雨が設けられたとのことです。

梅雨と聞けば、ふと、梅の実の収穫の頃が思い出されます。私達が子供のいりよへ耳にした言葉に、梅は梅雨に入るまではもじではないと記されて、梅もぎは入梅になつてからだつたと記憶しています。

もう半世紀以上になりますが、私たちの郷土は山畑や畑の周囲に梅の木がたくさん植えられていて、春には白い花をいっぱい咲かせて里山の麓みもとを白くほかし、風に乗つてあたり一面に甘い香りが漂つていました。

梅の花は永く咲いて人々の目を楽しませてくれますが、花の散ると同時に小さな実を



つけ、日ごとに大きさを増していきます。みずみずしい若葉の葉がぐれに、ヒスイのような青い実が初夏の光を浴びてきらきら輝く様は、自然がありなす素晴らしい天地の恵みをつぶさに感じずにはいられないものがありました。

こりつして自然の恵みを受けて育った梅の実はやがて熟し始めます。入梅もこの頃で、梅の実が熟すことから入梅と呼ばれるようになつたといつ一説もあります。

現在では入梅とは関係なく五月の下旬になると梅の実がスーパーの店頭に並びますが、しかし私の記憶の中には入梅の入りを待つて、田植えの準備で忙しい最中に早起きをして梅もぎに出かけていく農家の人たちの姿が思い出されて

なりません。

農家が大量に収穫した梅の実は八百屋や市場に買い取られ、家庭用の梅干しとして加工されていました。

梅干し作りはその土地に伝わった塩と青梅の程よい割合で漬けられますが、塩味がしつかりといった頃、塩揉みをした紫蘇の葉が入れられ、やがて田植えや田の草取りが終わつたころ、農家の庭先で新しい蓮の上に鮮やかな紅色に染まつた梅が土用の天日に干され、表面に白く塩が吹き上がつた時点で梅干しが出来上ります。

今でも入梅の声を聞く頃になるとたくさんの梅の実のある風景が思い出されてなりません。

## 田植え

神前地区の田んぼでは、五月の連休前よりトラクターや田植機の軽快な音が響き始め、連休が終わる頃にはまわりは一面に緑一色の田園風景となります。

機械化の進んだ今日では農作業も大変能率的となり、人々の労力も大きく軽減されて、田植えという農家にとっての大作業も僅かな日数で終えることができるようになりました。こうした農業の機械化の中で、ふと懐かしく思い出されるのが、遠い昔より永年に渡つて続けてきた日本の情緒あふれる田植えの光景です。



うが、まだ農業機械が導入されていなかつた、昭和三十年代までの田植えは、耕作から植え付けまでを人力・牛、小農具によつてすべてが手作業で行われていました。

田植えは古くより農家にとつての重大事であり、人々には大きな労働力を必要とされる辛い作業のひとつでもありました。しかし、一方では農家の祝い事でもあり、秋の豊作を願つての大仕事だけに、心の内には全力を尽<sup>つく</sup>して取り組まなければならぬといつ思いました。

当時の田植えは今よりも一ヶ月余りも遅く行われていました。なぜならば、その頃どこの農家でも米と麦の二毛作を実施していく、小麦・大麦の収穫が終わらなければ田植えの段階へと進めなかつたからです。梅雨空を気にかけながらのあわただしい取入れが行われての後、牛にからすきやまづわを引かせて、水田の中を「シーシー、チヨウ、チヨウ」と、牛を追う声が響き渡り、人畜一体の厳しい作業が行われていました。そのため、田植えが始まるのは六月下旬でした。

田植えの方法は地域により異なりますが、田の両端に縦に長い田植え綱<sup>つな</sup>が張られ、その縦綱の間に横綱が張られます。その両方の綱には八寸<sup>八寸</sup>（約二四センチメートル）毎に赤い布の印がつけられていて、まず横綱と縦綱の印を合わせて横綱を張り、その横綱に沿つて

八寸間隔で田を植えていきました。田は一握りほどの早苗を藁で結わえたものを、一反（十アル）に一五〇束程の割合で準備しました。

田植えはおもに女性が中心となつて行い、田植え時の女性たちは紺の着物に木綿の紺無地の手甲をはめ、もんぺ姿に日本手ぬぐいを姉さんかぶりにして、早苗取る手も鮮やかに田植えをしました。また、雨降りには菅笠にござをつけ、一列に並んで苗を植える風景は一枚の日本画を見ていいような情感を覚えるのでした。

あの頃より四十年近い年月の経過の中で、こうした風景はもう見られなくなりましたが、なぜかこの時期を迎えるとあの頃の田植え風景が懐かしく思い出されてなりません。



## ホタル狩り

暗い夏の闇の中を、やわらかく淡い光を放ちながら小さく消えていく光の癒し、ホタルは日本では夏の風物詩の一つに数えられてきました。

古くは平安時代、清少納言の書いた枕の草子には、かの有名な「夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ並の多くとびちがひたる、また、ただ一つふたつなど……」と、ホタル狩りをいとあかしく書き表した書物もあります。

ホタルは、私たちの郷土神前地区においても、昭和三十年代の中頃までは五月の末から六月にかけて田んぼの用水路や小川の上を飛び交う姿が見受けられました。しかし、今では曾井町・寺方町の用水路に源氏ボタルがわずかに生息するといわれるほかには、その姿を見かけることは少なくなっています。おそらく河川の汚れや自然破壊などによってホタルが住めなくなってしまったのだと思われます。

ホタルといえば、子どもの頃、近所の友達を誘つてホタル狩りに出かけていった楽しい思い出がよみがえってきます。

当時、ホタルが出現する季節ともなれば、何はさておき、子どもたちは収穫したばかりの麦わらでホタルかごを編んで、夜になるのを待ちわびて、うす暗くなり始めると早々にホタル狩りに出かけて行きました。

みんなは川岸に立って、声を揃えて「ほつ、ほつ、ホタルこい、そっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ」と唄いながら、ピカツ、ピカツと小さな光を点滅させながら小川の上を飛び交うホタルを捕らえて麦わらのホタルかごに入れていきます。捕らえたホタルの数を競い合い家に持ち帰ると、カヤの中にホタルを放して灯を消して息をこらし、じっと見守る中、やがてホタルはカヤのあちこちに止まり、ピカツ、ピカツと宝石のような美しい光を放ち、子ども



たちを喜ばせてくれました。

幻想的な美しさを見せるホタルもその生命は短く、「ホタル」「十日じせき三田」と言わ  
れ、美しいだけにその生命のはかなさに一抹の哀れを誘わざにはいられないものを感じま  
す。

私たちの心の中にさまざまな夏の夜の思い出を残して姿を消してしまったホタル、神前  
地区にはまだ多くの自然が残されています。みんなで地域の自然保護に心掛け、今一度郷  
土の川にホタルを呼び戻して、夏の風物詩「ホタル狩り」を楽しめたらと思います。

## 水車

「コツコツコツ」とゆるべく回る水車。

水車は水の流れを利用して、それを動力として米つき、粉挽き、わら藁打ちなどに使われていました。当時、水車による米つきの使用法として、水車小屋の臼に玄米とみがき砂を入れて一昼夜の時間をかけて米をついていたのでした。

神前地区においても昭和四十年頃までは寺方一区に二カ所、寺方二区に一カ所、高角に八カ所、曾井に二カ所、尾平に四カ所の共同水車があり、水車仲間が集まって運営していました。また、この他にも車屋と呼ばれる個人が管理する水車も四カ所稼動していましたが、時の流れの中で次第に作業の効率のよい電動米



つき機へと移行していったため、現在ではもう水車のある風景を見ることができなくなつてしましました。

こうした中で、とりわけ私たちの中に深く印象付けられている水車の一つに寺方町の大日寺弁慶石の前を流れる川にかかる水車が何時もコツトン、コツトンとゆるやかに廻つていた姿が思い出されます。

また、平成二十一年八月二十三日、直木賞作家 伊藤桂一先生 の詩碑いとうけいいちが大日寺に建立されました。

『水  
車』

ぼくは ふみきとへ 帰つたときには  
まだその水ぐるまを おぼえていた  
けれども 向うは ぼくのことなど  
といへば 忘れてしまつていて

ゆめり ゆめり

薄うすの中で

まわつていた

伊藤 桂一



その詩碑の中に歌われている「水車」<sup>みずぐるま</sup>は、

ふるさとを永く離れ、久々に帰ったとき、水車は作者にとっても印象深く、かつ、懐かしい存在であったことが偲ばれます。

平成二十二年十月、往年の田園風景を復元しようと地元建設会社の会長が小屋の壁面に水車の絵を描き、水車の模型を制作、詩情溢れる水車は詩碑に刻まれた文字と同じく、「ゆるつ ゆるつ」と廻っています。

## 三滝川

三滝川は、鈴鹿山脈を源流とし、菰野町を経て四日市市に流れる一級河川であります。幹線流路延長二十三・三キロメートルに及んでいて、川名は源流付近の百間滝・蒼滝・潜戸の滝の三つの滝がその名のおこりであると言われています。

三滝川につながる支流には金渓川と矢合川があり、金渓川は菅原町で、矢合川は高角町で三滝川に合流します。三滝川は神前地区を西から東へ五・五キロメートルにわたって流れ、伊勢湾に注いでいます。

三滝川は、ふだんはせせらぎの音が耳に心地よく響く静かな川であります、一度大雨が降ると増水して、暴れ川となり、水害を起こしかねない恐ろしい川となります。

今から百年以上も前、長雨の増水により尾平町付近の堤防が決壊し、低地であつた天王川原・永井は浸水に見舞われて、水による災害を受けたことが記録に残されています。現在も三滝川の増水時には高角町の自治会・神前消防団により見守りがおこなわれています。

一方、三滝川は永年に渡り私たち神前の住民の生活と共にあり、水は田畠を潤し、生活

の水を供給したりして、私たち住民にとっては大切な生活の源ともいいうべき働きを果たしてくれています。

また、自然環境にも富み、高角橋の上に立つて眺める景色は実に美しく、西には緩やかな稜線を描き連なる鈴鹿の峰々が広がり、のんびりと糸を垂れる釣人、川遊びを楽しむ親子の姿など、さながら絵画の世界を見る思いがします。この豊かな自然に触れ合ってもらおうと、毎年八月には四日市市環境学習センター主催の自然観察会が高角橋周辺で開催されています。

過去には子供も余にみな魚のつかみ取りがあこなわれていたこともありますが、現在は河川敷で高齢者によるグランジゴルフが盛んで、なごやかな憩いの場となっています。



## 矢合川

近鉄高角駅より南へ三〇〇メートルほど進んだ所の丘陵地に建つ住宅団地の背後に、四季折々の自然の姿を織りなす小高い里山があります。この山は古くより「一生吹山」と呼ばれて、地元の人々の間では大変親しまれてきました。

正面の長い階段を登るし、登りきった所が公園になつていて、桜や楓が何本も植えられています。春になると桜が公園一面に花を咲かせ、お花見をする大勢の人で賑わいます。また秋には楓が紅葉して、赤と黄色の鮮やかなコントラストをなし、公園をつつみます。



隅にひっそりと息をつめるようにして祀られている小さな毘沙門堂があります。この毘沙門堂は、敗戦の責を負い、自ら若い生命を散らした佐倉城主、小林備前守重則の無念を慰めるために建てられたものです。最初は浅間神社という社が建てられていましたが、明治四十二年、社の合祀が行われて浅間神社は椿岸神社に合祀されました。その後、智積町（桜地区）の有志によつて信貴山より毘沙門天が勧請されて現在の毘沙門堂が建立されたといわれています。堂内は毎間でも薄暗く小さな蠟燭の灯がなぜか人の世の哀れを誘います。

また、この公園からは合戦の最後の舞台となつた矢合川が一望できます。矢合川を挟んで壮絶な合戦が行われたことは、今も「一生吹山」の歴史の一ページに深く刻まれています。

残された史実によれば、十六世紀の半ば（戦国時代）の頃、現在の智積町の辺りに、小林備前守重則と名乗る佐倉城主が居城し、弱冠十八歳という若さで南朝方の守りのために一生吹山に砦を築いて敵の襲来に備えていました。天文八年（一五三九）、かつてより警戒をしていた鈴鹿の峰城の城主、峰盛定が三千という大軍を率いて佐倉城に攻め込もうとしてきました。佐倉城主は「一生吹山」の砦に陣を構えて峰軍との戦いにのぞんだのでし

たが、峰軍の三千という大軍の前にはじのように応戦を試みてもかなわず、佐倉軍は次第に力弱まり、砦の守りも危うくなつて、生水川（矢合川）の北岸まで後退せざるを得なくなり、川を挟んでの矢を射合う凄まじい合戦となりました。

力の限り応戦した佐倉軍でしたが、多勢に無勢、ついに力尽き、敗戦を前に佐倉城主小林備前守重則は武運の尽きたことを悟り、哀れにも十八歳の若さで自害して果てたのでした。

この時まで生水川とよばれていた川名が、この戦いを境に入々は矢を射合わせた場所にちなみ「矢合川」と改名したといわれております。

矢合川は今日も、遠い日の凄まじい合戦の出来事などなかつたかのように静かに流れ続けています。



# お月見

つきみ

旧暦の八月十五日は中秋の名月と呼ばれ、古くよつねやわらかなお月見の行事が行われてきました。

お月見は、最初は宫廷行事の一つとして月を眺めながら管絃や詩歌を楽しむといった貴族の間でしか行われていませんでしたが、江戸時代になつてようやく一般庶民の間にもお月見を楽しむという習慣が生まれました。

お月見のルーツをたどれば、中国で行われていたもので、里芋の収穫祭が起源だといわれています。そつした意味合いからか、今なお、お月見には里芋は欠かすことのできない月への供物とされています。

また、お月見の習慣は各地によって異なり、さまざまな形でとり行われていますが、私たちの地区ではお月見といえば懐かしく思い出されるのが、子供の頃の尾花取りです。裏の里山で萩やススキを手折り、両手いっぱいに抱えながら、「出た出た月が あるいは あるいは まんまるい ほんのような月が」と大声で歌いながら友達と裏山を歩いた

日のことが思い出されます。お月見に供える萩やススキ取りなどもたりの仕事になっていたのでしょう。

夕方になると、各々の家では縁側に机を出して、その上に里芋、月見団子、萩・ススキを添えて飾り、月の出を待ちました。

いつもは、子どもたちに夜の外出を禁じている親たちも、この口ばかりは夜の外出を許し、子どもたちは近所の家々を廻って里芋や団子をご馳走になり、月を眺めながら夜遅くまであしゃべりに余念がありませんでした。

こうした一般的なお月見の他に、四日市市のあたりの地域で、「つまみどりぼうお月見泥棒」と呼ばれる変わったお月見の風習が行われていますがあります。「お月見泥棒」とは、子どもたちが



他家の庭にそっと忍び込み、供物の芋や団子を盗んでもらうと、子どもたちにすればた  
いへんスリルを感じる楽しい行事のようですが。しかし、いつした風習も徐々に姿を消し  
て、現在ではほとんどの一部の地域でしか行われなくなっています。ぬぐぬぐく変貌を遂げ  
る現代社会の中で、古いものがひとつと姿を消してしまったことは、淋しい思いが  
します。

大小の 小坊主の影 芋泥棒

(みのよ)

## 彼岸花

毎年、秋の彼岸の訪れと共に、決してその時期を忘ることなく田んぼの畦や堤の土手に唐突<sup>とうとつ</sup>に地下から姿を現し、高さ三十センチから六十センチの花茎<sup>かげい</sup>を伸ばし、頂に朱赤の蕊<sup>しび</sup>の長い花を数個つけて、またたく間に辺りを朱に染めて咲く彼岸花を見かけます。

この花は、彼岸の頃に咲くといろから和名で「彼岸花」と呼ばれていますが、方言での呼び名は多々あり、曼珠沙華<sup>まんじゅしゃ</sup>・舌まがり・数珠掛花<sup>じゆづかけばな</sup>・火事花・墓花・死人花・カブレ花・テグサレ花などの花名で呼ばれていて、その他にも四百以上の方言名があるそうです。

そうした花名の多いところから推察しても、なぜか昔から私たちと深い関わりのようなものを感じさせられます。

一方で、深い関わりとは別に、赤くあでやかで、外見からは想像もできないことです  
が、昔から忌み嫌われる花として敬遠する人も少なくありませんでした。

なぜならば、その理由として、昔から墓地のそばにたぐさん咲くといろからその名を死人花・数珠掛花・幽霊花などとよばれ、人間の死に関連する不吉<sup>ふきつ</sup>な呼び名のためであつた

からかもしだせん。

しかし、最近では「」した声も聞かなくなったり、秋を代表する花のように雑誌のグラビアや写真展などで朱に輝くあでやかな姿を見受け、親しみ深い花の一つとして身近に感じられます。

九月を迎えると、私たちの住む神前地区内においても、あちこちに彼岸花の赤く群れて咲く姿が見かけられます。

土手一面に火を吹くように咲く彼岸花を眺める度、赤い花の炎の中に激しい情熱と一種の女の業のようなものを感じます。



赤々と女の業が燃ゆる如

彼岸花咲く頃は哀しき

(みちよ)

哀しいまことに朱く美しい花、そうしてまた、遠い日に花冠はなかん・首飾りなどを作つて遊はん  
だ郷愁への思いをよみがえらせてくれます。

## 大根のある風景

昭和四十年代までの神前地区の農家では、師走の声とともに、あちこちの畑で大根を収穫する百姓の人たちの姿が見受けられました。

「大根引き 大根で道を 教えけり」の俳句そのままの情景が目に浮かびようです。

なぜこの時期になると一斉に大根の収穫にあたつたかとおもいますと、冬至を過ぎてからの収穫は「大根の中にはが入る」といわれるため、農家では冬至を迎えるまでの収穫をいそいだのでしょうか。

リヤカーに山積みされて運ばれた大根は、四、五本ずつ一束にして家の庭に青竹で組まれた稻架にかけて、大根がしんなりするまで天日にて干し、沢庵漬け



にしました。

その頃の農家では、いびつな形のものや並はずれて大きな大根などは切り干し大根として、程よい大きさに切って細縄に通して軒先に吊ります。この季節になると、どこの家の軒先にも切り干し大根のすだれがかかるつている風景が見受けられました。

寒い冬の日に、練炭火鉢に鍋をかけ、干し上げた切り干し大根を水でもじして、油あげを添えてコトコトと炊き上げた味は、実に絶妙極まるその土地に伝わる郷土料理に他ならない思いがします。

また、冬の野菜の乏しい時期の大根は、貴重なビタミン源で、畑の隅に穴を掘つて大根を蒔などでくるんで土中に埋め、必要に応じて掘り出して食しました。

大根料理には、この他にも郷土に伝わるあ七夜の大根汁があります。

あ七夜は、浄土真宗の開祖親鸞聖人の命日に当たる前一週間を指し、親鸞聖人の遺徳を偲ぶ仏事で、浄土真宗の門徒の家では、夜はお参りを行い、新米で仏飯を炊いて大根汁を添えて供えます。

そのときの大根汁に使用される大根は、太くて柔らかいものが用いられます。大根を五センチほどの厚さの輪切りにして皮をむき、竹ざるに並べて一日から三日間陰干しにした

ものを、味噌と砂糖を合わせた汁の中に油揚げと一緒に入れて半日ほど炊き上げます。翌朝に鍋の中を見ますと、あめ色に染まつた艶やかな大根汁ができるまであります。

大根は一夜の間に味噌の「汁」を吸い込んで、汁の上に乗せるひとつの力なるような味がついています。

この味は、素朴な中にいつまでも決して忘れない」とのできないお七夜大根の味。いつもした郷土の味は永く大切にしていきたいものです。

時の流れと共に少しづつ姿を変えていく郷土ですが、なぜか師走の風の中に、大根のある風景をみる思いがします。

## 曾井山のみかん

曾井山で栽培さいばいされているみかんは歴史れきしが古いといわれていますが、産地としての知名度は低く、全国的に知られていないのは残念です。

曾井山は起伏きふくが少なく平坦に近い地形で水田、畑、桑畑などの耕作地造りに流された汗が現在のみかん産地づくりに大きく寄与きよよされているのだと思います。

一時、用途外のゴルフ場、高級住宅地として開発する夢のような話も聞かれましたが、何時の頃からか浮かれた話も聞かれなくなり、もとの静かな里山となりました。



曾井山のみかん畠は四方を山林に囲まれて冬の寒風から守られ、夏には台風の被害を受けにくい地形となつてゐるため、特に温暖な気候を好みみかんには、有利な立地条件が整つています。

冬場の寒さを嫌うみかんも陽気がよくななる五円には真白い花が咲きます。花は小さいが、山一面に広がる甘い香りに誘われて数多くの小鳥たちも集まつてきます。また蜜を求めてミツバチも飛び交います。みかんの蜜は芳香で良質の蜜ができるようです。

初夏の一 日、みかんの花咲くお休み処は、散策に訪れた家族連れなどの人気のスポットになつています。

早生みかんの収穫が始まりますと、近くの保育園、子ども会などがみかん狩りに訪れます。緑と太陽の恵みをしつぱいに受けた里山でみかん狩りを楽しみ、お弁当をいただき頃には小鳥たちもちびついを出迎え歓迎してさえぎり鳴いています。帰りにはいづぱいのお土産をいただき、といひにはちきれんばかりの子どもたちの笑顔があります。

秋も深まりますと晩生みかんも収穫されます。一個ずつハサミを使い丁寧に収穫された



みかんは、専用の木箱に入れて保管倉庫に貯蔵されます。曾井みかんを語る時、昔から酸っぱい、皮が厚いといわれていましたが、長所は長期に貯蔵できることです。しかし最近の傾向としては、皮は薄く程よい酸味と甘さを売りにした消費者ニーズに合わせた新品種に改植が進められています。お正月を過ぎた頃からみかんの直売所が地域の幹線道路沿いに臨時に開設され「曾井みかん」のブランドで販売されています。

生産者の顔が見えて食の安全が約束される曾井みかんは近在の人々のワチワチで遠くから足を運ぶ常連客も多く見かけます。この「ヒーパーター」が増え、「曾井みかん」の美味しさがお子さんからの高齢者まで広く認識されたことは喜ばしいことです。



## 小溜池公園

尾平町の神明神社の東の道をまっすぐに北へ一〇〇メートルほど進むと通称「大溜」と呼ばれている灌漑用水の池に突き当たります。

この池名は「谷田池」で、「ふるさと神前」で紹介されていますが、（一八三〇～一八四四）、ひどい干ばつにみまわれて農民たちは水不足の被害を受けて稻作の不作に苦しみました。

その時、百姓の苦境を見かねた尾平村のときの庄屋、多田市左右衛門正武、横山幸右の両氏が中心となつて、谷田上池建設に立ち上がり、三年間の年月をかけて谷田池が完成したと



いつ記念碑が、池の東側に建つています。その後、尾平村の水田をこの池の水が干ばつから守つてくれました。

永きにわたり大きな恩恵おんけいを授けてきたこの池も昭和の後期になつて田畠は住宅地として造成され、埋め立てられて、今では池の周りにたくさんの家が立ち並んでいます。

この谷田池と並んで、道を隔てた東側に平常はあまり水のない雑草の生い茂つた谷田池の三分の一ほどの小溜池がありました。

尾平町の自治会で除草作業を行い管理をしていましたが、安全な子どもたちの遊び場を求める声が起こり、「小溜池を子ども達の公園にしては…」との意見が出され、子ども公園が作られることになりました。





「花と緑いいっぱい事業」の一環として、緑化基金を活用して、公園の建設事業が始められて、平成十八年十一月に子どもたちの遊び場「小溜池公園」が完成しました。ここには四季折々の草花・睡蓮・浮き草・菖蒲などが植えられて、訪れる人々の眼を楽しませてくれます。春には、ソメイヨシノの桜の大木が枝いっぱいに花を咲かせ、春風に花びらが舞う風情は言葉に尽くせないものがあります。

静かで環境のよい小溜池公園、振り返ればかつては水不足から農作物を守るために作られた溜池も、時の流れの中で、今では子どもたちの遊び場として姿を変えて、人々の環境保護に役立つていってくれます。

この先、花と緑の公園に子どもたちの元気いっぱい明るく楽しい声が満ち溢れることでしょう。

## 大日山

だいにちやま

高度成長期を迎える以前、神前地区周辺は豊富な自然に恵まれていました。しかし、近代化の波により、川島、桜、三重の里山は大規模団地が造成され、今では神前地区に残っている里山が、市内でも貴重な自然を残す地域となっています。

かつて天神山と呼ばれた里山は、市町村合併の後、大日山と名称が変わり、子供たちの遠足の場や人々の松茸狩りの場として親しまれています。しかし、高度成長期とともに人々は里山と触れ合う機会がめっきり少なくなりました。

神前地区でも平成七年から『かつてのような自然とふれあえる里山を作ろう』と、神前地区地域社会





づくり推進委員会が中心となり、大日山に散策路（遊歩道）を作る保全整備を進めてきました。この活動は住民主導で進められ、住民の熱心さが行政を動かしたほどに、市内でも先駆的な取り組みとなっています。またこの保全整備に加え、東屋の設置、しだれ桜の植樹や小学生の卒業記念植樹、竹炭作り、神前地区社会福祉協議会青少年部の企画による「ふれあい事業」など、数々の自然に親しむ行事があこなわれています。

これからばかりづくじを考えた時、精神的にゆとりを持って身近な自然に親しみ、野鳥や草花とふれあう機会を作り、豊かな社会を築いていくことも大切にならきます。私たちの生活の場から自然が少しづつなくなるにつれ、里山

の大切さが見直されています。そして、今日では数少なくなった自然を残すことが環境問題を考える重要な要素となつてきています。

神前地区の西に位置する大日山は遊歩道が整備され、「かんざき里山を守る会」のみなさんで草刈や竹林の伐採などして守られています。また、神前地区の小学校の卒業生による記念植樹が毎年行われ、子どもたちと共に大きく成長しています。

大日山にはソメイヨシノ、ヤマザクラ、アラカシ、タブノキ、ヤマツツジ、クリ、アカマツなど五十種類ほどの木々があり、小鳥のさえずりも聞こえ、春には桜の花びらが舞い、夏には蝉しぐれ、秋には紅葉狩り、冬には山頂から眺める山々の景色と四季折々の風情が楽しめます。

遊歩道も階段が設けられ、昇り降りも安心です。  
みなさんも一度訪れてはいかがですか？